

はない。それよりも、私は否定せずにはおれなかったところに、人間朔太郎の姿を見るのである。それはあまりにも形而上的であり、人間的であり、純粹な魂であり、浪漫的である。この浪漫性は、何々のためというあらゆる一切のたれを問題にせず起る。それは一切の巧利の問題でなく、真の己に立ち返ったものの中から起る。

「僕は自ら、何等の思想的解決をも有して居ない。けれどもただ、解決があたへらるべき未来に向って、僕の「暗示」を投げよ

球磨郡山江方言の敬意表現法

はじめ

球磨郡には、国語史上、古語に属する敬語（鹿児島敬語）の多いことに気づき、興味を持っていたので、これを、調査、研究してみようと考えた。そこで、本稿では、球磨郡山江地方における生活語の中から、敬意表現について、観察、把握しようとするものである。

山江は、熊本県の東南部、鹿児島県と、宮崎との境に位置する球磨郡の西南部にあり、全体の約八三%が山岳で、耕地は、約四%である。中央を、南北に縦断する山岳で、二つに分かれており、東部を山田地区、西部を万江地区に分けている。もともと、この二つの地区は、別の村であったが、明治二二年四月市町村制施行により合併し、山江村と称して現在に至っている。

うとする意志をもっている。」

彼の「詩情するところの精神は、永遠のヒューマニズムに本質して」いた。それゆえ、彼は常に「夢を追う人」なのである。

参考文献

「萩原朔太郎研究」

「近代文学鑑賞講座」—萩原朔太郎

「萩原朔太郎」

伊藤信吉編 思潮社

伊藤整編 角川書店

藤原 定 角川新書

内 山 葉 子

中心部は、東部の山田地区で、役場、農協、駐在所郵便局、村内唯一の中学校などが、山田樂園に集中している。この樂園は、人吉市内から、約四キロメートルのところにあり、交通の便もよい。

また、郵便、電話は、人吉局に属しておりその他の面でも、人吉市に依存する度合が大きい。たとえば、山江村は、無医村であった病人は、すべて、人吉市内の病院に運ばれるし、買物も、ほとんどが、人吉市内の店でなされている。

調査方法としては、自然会話の中から、敬意表現に関するものについて注意しながら、カードに書きとめる方法と質問法の二方法を用いた。特に、敬意表現をよく使い、方言をよく使うと思われる。老人層、中年層の会話に注意した。

本項の元の記述体系は、次のとおりである。

- 一、用言に関する敬語法
 - 1. 尊敬法
 - 2. 丁寧法
 - 3. 謙讓法
- 二、体言に関する敬語法
 - 1. 代名詞
 - 2. 接尾辞
 - 3. 主格表現
- 三、文末詞に関する敬語法

ここでは、紙面の都合上、特定の項目は限って記述をすすめることにする。

一、述部尊敬法

1. ナル

「ナル」は、尊敬法、「ナル」「ヤル」「ルラル」の中で、最も敬意の高い敬語である。

○オギヤンシヤ、ミナレンダツツオナ。

うちの人は見かけられませんでしたでしょうね。(中女↓老女)

○ハヨ、モドツテ、キナイヨ。

はやく帰ってきて下さいね。(青女↓老男)

目の前にいる相手に対し、話し手が、敬意をもって話すとき、使用されている。また、第三者に対しても、話者が、敬意をはらうべき相手であると判断した場合に、使用されている。男性よりも、女性が多く使い、子どもよりも、大人の方が多く使う。

敬意の高い敬語であるから、目上の人が、目下の人に使う場合は少ないのであるが、目下の相手を、目の前にした場合は、相手に敬意をはらって、使用する時がある。

○キタナカ アシデ アガンナンナヨ。

汚ない足で(家へ)あがらないで下さいよ。

これは、母親が、中学生の息子に対して言ったことばである。また、初対面の、自分の孫の友達に対して、老人男子は、次のように言った。

○ムシン コエワ キキナイタロ モンナ。

虫の声はお聞きになったでしょうものね。

この老人は、初対面であるということで、相手に、一応、敬意の意識を持って言ったものと思われる。しかし、男性で、しかも、老人が、目下の人に使うのは、稀である。

この「ナル」に、丁寧語の「モス」を接続させると、「ナル」よりもっと敬意の高いものとなる。

○キユーワ ナンバ シナンモシタカ。

今日は何をなさいましたか。(中女↓老女)

○イサギー ガマンダシナンモスナ。

えらく精をだしていらっしゃいますね。(老女↓中男)

この、「ナル+モス」の使用者は、中年以上の、特に女性に多い。青年以下は男女とも使わない。活用は、次のとおりである。

ナル	ナリ	ナ	ナレ	ナレ	ナイ
ナル	ナリ ナツ	ナ	ナレ	ナレ	ナイ
基本形	命令形	未来形	条件形	否定形	完了形

どの活用形も、よく使用されているが、特に命令形、完了形の使用が目立っている。各活用形の使用方法を、次のべてみることにする。

命令形 ○クワンデ イレトキナイ。

食べないで入れておいて下さい。(孫↓祖父)

○ハヨ イキナツ。オスナツ バイ。

はやく行って下さい。おそくなりますよ。(老女↓老男)

「ナ」を使った時は、命令の度合が強くなり、「ナイ」というよりも、品位はさがる。中年以上の男女が使っている。

未来形 ○ジーサンモ イキナロー。

じいさんも行かれるでしょう。(老女↓中女)

条件形 ○アスデ イキナレバ ヨカテ。

遊んで行かれたらいいのに。(青女↓中女)

否定形 ○ダンモ オンナレンジタル ナ。

誰もいらっしやらないみたいです。(老女↓同)

完了形 ○ゼンナ ツクリヤン イレトンナイタギナ モン。

お金はふところに入れておられたそうだもの。(老女↓同)

2. ヤ ル

「ナル」よりも、敬意は低いが、よく使用されるものに、「ヤル」がある。

「ヤル」は、江戸時代にはいつて、「動詞の連用形に『ある』」を添えた『行きある』の如きは、『行き合う』がユキヤウとなるのと等しく『行きやる』となり、そこから助動詞「やる」が独立するに至った。『万国語史要説一九六ペー』

○イシャドンナ ナンチャッタ ヤ。 お医者さんは何と言われたかい。(老女↓中学生男)

○サダツドンノ キヤッタ バイ。 定沼さんが来られましたよ。(青女↓老男)

よ。

どの年令層でも、頻繁に使われているが、男性が使う方が、いくらか多いようである。同じ相手に対して使うにしても、男性は、「ヤル」を、女性は、「ナル」を用いる傾向が認められる。

家に来客があった時、来客の耳に届く範囲で来客を告げる時は

「:サンノ キナイタ バイ」と言うが、そうでない時は、「:サンノ キヤッタ バイ」というのが普通である。これは、相手を、

第三者とみるからである。一般に、敬意を払うべき相手とみた場合

でも、その相手が、第三者となった時は、「ナル」よりも、「ヤル」を使っているようである。

○ハヨー シヤイ。オマイ バイ。 早くなさい。あなたの番よ。(小学生女↓同)

○ソギヤ アンマ ワリヤンナ。 そんなにあんまり笑わないで。(中学生↓同)

などのように、同等のそれも親しい者に対してのみ、直接使うことがある。この例にもあげたように、特に、小中学生の女子に多いことが注目される。男子の生徒は、この場合、無敬語の、「ワルナ」「セロ」を使っているのである。活用は、次のとおりである。

基本形	命令形	未来形	条件形	否定形	完了形
ヤル	ヤリ	ヤ	ヤレ	ヤレ	ヤッ
	ヤリ				
	ヤッ				

命令形の「ヤイ」は、「ヤリ」から転じたものと思われる。「ヤ

「リ」よりも「ヤイ」の方が、やさしくひびく、相手に命令する場合でも、相手に対して、いくらかでも、尊敬の気持が働いている場合であるから、やさしいひびきの方が用いられるのである。

「ヤリ」は、あまり使われない。「ヤッ」と促音にすると、命令度は強くなり、品位は落ちてくる。完了形は、「ーシヤイタ」ではなく、「ーシヤッタ」と促音となる。よく使用されるのは、命令形、完了形である。

3. ル・ラル

「ル・ラル」は、尊敬法の中では、敬意は低い。しかし、老人から子どもまで、どの年齢層からも、広く聞かれる。また、使用するがわ、使用されるがわの男女の区別がない。「ナル」などを、あまり使わない子どもたちの間でも「ル・ラル」の使用は、頻繁である。

○オドング センセワ オナゴンクセ オゴラツ ゴー。

僕たちの先生は女のくせに怒られるよ。(小学生↓同)

○アスコンシノ 五十円 チユワイタ モン。

あそこの人が五十円とおっしゃったもの。(青女↓同)

目上の者に対してよりも、目下の者に対してや、同等の者に対して使う方がはるかに多い。無敬語よりも、少し敬意があるといった程度のものである。第三者に対して使うのが常である。だが、

○ダメットツテ サットー。 黙っててなさるよ。(中学生↓女)

(同)

このように、相手に直接言う場合がある。第三者に対して言うような口ぶりで、対面している相手に、言っているのである。この場合の使い方について、六十五歳の老女に問うと、「ミサゲテ ケイベ

ツシテユートキ ツカウ。」という答であった。直接相手に使う場合は、軽蔑的に使っているようであるが、ずばりと言わず、他人事みたいに、遠まわしに言うことからみると、ただ単に軽蔑の気持に限らず、普通、滑稽とか、皮肉、揶揄の気持で用いられているようである。

○オギヤンシヤ ヤマン イカイタ バイ。

うちの人は、山に行かれました。(中女↓中男)

自分の身うちの者について話す時を使う。この場合、家の中でも、夫とか、老人とかに対して使っており、敬意は保たれている。活用は、次表のとおりである。

基本形	命令形	未来形	条件形	否定形	完了形
ル	ー	ラロ	ラレ	ラレ	イ
ラル	ー	ラロ	ラレ	ラレ	ライ

「ル・ラル」には、命令形がない。命令形を使う時は、敬意の高い「ナル」「ヤル」を使う。

4. 尊敬法のまとめ

以上述べた、尊敬法を、敬意の高い順にならべてみると、「ナル」「ヤル」「ル・ラル」となる。これを、「来る」「行く」について述べてみると。

- キナル ●キヤル ●ゴザル ●クル
- イキナル ●イキヤル ●イカル ●イク

となる。上から下に行くにしたがって、敬意は低くなる。「来る」

にかかわる「ル・ラル」敬語は、用いられない。「コラル」などは言わず、「コラル」にかかわる別系統の、「ゴザル」を用いる。「ゴザル」は、一般に、「グザル」と発音したる場合が多い。この「ゴザル」は、本来、「居る、来る、行く」としておこなわれているものであるが、当方言では、「来る」のときのみしかおこなわれない。したがって、「見テゴザル」「家ニ居テゴザル」などの使用例はない。

次に、尊敬法の命令形について、みてみたい。「行く」「来る」について、敬意の高い順に列挙してみると、次表のようになる。

△行く▽

- ① イタテクダンモシ
- ② イタテクダイ
- ③ イキナリ・イキナイ・イキナツ
- ④ イキヤリ・イキヤイ・イキヤツ
- ⑤ イケ
- ⑥ キヤイケ・ハツテケ・サデイケ

△来る▽

- ① キテクダンモシ
- ② キテクダイ
- ③ キナリ・キナイ・キナツ
- ④ キヤリ・キヤイ・キヤツ
- ⑤ ケ
- ⑥ キヤケ・ハチケ・サデケ

①は、年上、それも、老人などに対して、老人同士、中年層が、使っていることばである。

② タマニヤ アスビ キテクダンモシ。たまには遊びに来て下さいませ。

③は、①より使用範囲が広くなり、若年層でも使う。④⑤とも、

命令するというよりも、相手に、懇願しているような言い方である。婉曲に、命令していることから、敬意は高く上品な言い方である。③はどの年齢層からも使用されている。目上の者に対してとか、敬意を払うべき相手に対して使用する。子どもは、目上の者に対してのみしか使わない。

④は、軽い敬意をもった程度のもので、同士の間で、大人から子どもまで使っている。

目下の者や、気心のしれた者同士で使っているのに、⑤がある。男女どの年齢層でも使っているが、男が使う方が多い。

一種の卑下語とみられるものに、⑥がある。子どもが使うより、大人が使う方がはるかに多く、目下の者に対してだけ使っている。

「キヤ」「ハチ」「サデ」などの、すてばち侮蔑の意を持つ接頭語を使うことによって、下品な、敬意の低い言い方となっている。

○ワガ コツチ ハチケ。君がこっちに来なさい。(中男→青男)

当地方では、「ーシナイ」「ーシトツナル」などというより、「ーシナツセ」「ーシトラス」などという方が、新鮮で、あかぬけして聞こえる傾向がある。自分を、村の中でも知識人とみている人々の間などで、この熊本弁であるところの、「ーシナツセ」「ーシトラス」などを使う傾向にあることが感じられる。

○イットキ カエツテキトラシタトデス バイ。

一時帰ってきていらしたんですよ。(中女→中男)

○サト ハヨ アガンナツセ。

さあ、早くおあがり下さい。(中男→同)

地理的に、鹿児島に近く、鹿児島的敬語「モス」「ヤル」などを、使

ついでながら、この言い方よりも、熊本弁の方が使われたらしいことが、注目される。

二、文末詞法

当方言における、文末詞の中から、単純感声的な文末詞である。

ナ行文末詞について、みることにする。敬意の高い順に、「ヌ」「ナ」「ネ」「ナイ」「ニャ」を、とりあげてみたい。

「ヌ」は、当方言では、老年、中年男子のみが、使っている文末詞である。敬意は、「ナ」よりも上である。ある老人が、若い頃年寄の男性に対して、「ジーサンヌツカナー。」（おじいさん、暑いですね。」と言ったところ、言われた老人は、「アヤツガオレン、ドーシンユーゴトナーチュタ。」（あやつが、俺に、同士に言うように、ナーと言った。」といて、立腹したという。このことから、「ナ」より、敬意は上とみることができると思う。

○コンゴロ 三年忌バ シヤツタデ ヌー。

このごろ三年忌をなさったですからね。（老女↓同）

○バーサンナ ゲンキン ヨカ ヌー。

ばあさんは、元気がいいですね。（中男↓老女）

年寄夫婦の間で、妻が、夫に対して、

○キモン ミツクット ス。 着物を見つけるのですか。

○ゲタワ アツタ ス。 ゲタはありましたか。

などと言っているのを聞いた。

現在、老人同士、（男女とも）中年男性が老人に対して言う時のみしか用いていないが、四十六歳の男性が、中学生の頃は、隣のおばあさんなどに対して、「テンキン ヨカ ヌー。」（天気がいいです

ね。）などと言っていたと語った。昔は、もっと広い年令層で、使用されていたものと思われる。現在の「ヌ」は、以前ほど、敬意の高いものとは、思えなかつたが、使っている中年男性は、「ヌー」チュタホーガ 年ヨリヤ ヨロコバツ。」（ヌーといった方が、年寄りには、喜ばれる。）と言っていた。「ヌ」を使う相手は、老人でも、ごく親しい人であって、親愛語とも、言えるものではないかと思われる。「ヌ」と長音にすると、相手に同意を求めめる度合が、一層大きくなる。

「ヌ」よりも低くなるが、「ナ」は、男女年令に関係なく、広く使用されている。「ナ」を使用する時は、相手に対する尊敬の念がある場合で、同等、もしくは、目上の人に対して使用している。

○テレビバ ミラントナ。 テレビを見ないのでですか。（中学生↓中女）

○コンシタ ムゾカロ ガナ。 この人はかわいいでしょうがね。

（青女↓老女）

「ナ」は、子どものあいだでは使っておらず、子どもが使う時は、相手が、目上の人の時のみである。

子ども同士、または、大人が、子どもに対して使う文末詞に「ネ」がある。敬意は、「ナ」よりも低くなる。この「ネ」は、共通語の「ネ」とは、区別して使っている。共通語の「ネ」のほうが、敬意は高いようであり、上品に聞こえる。当方言で用いられる「ネ」は、[nje]「ネイ」と、発音される。

○コンダ、マミチャン、バイネイー。 今度は、まみちゃんよね。（小学生↓女同）

「ネイー」と長音にした方が、相手に対する呼びかけ性が強くな

る。

「ナイ」は、一般に、大人が、目下の者に対して言う時に用いる。中年以上の男性は、同士間でも使っているが、中年以上の女性は、目下の者へのみしか使わない。「ネ」は、大人の間で、同士にも使うことがあるが、「ナイ」は、目下へ使う方が多く、「ネ」よりも敬意は、下になる。

○ヌッカ ナイ。暑いね。(中男↓同)

○キユーワ ハヤカッタ ナイ。今日は、(帰りが)早かったね。(中女↓息子)

若年層では、使用されていないが、現在、中年の人たちが若い頃、しばしば使っていたということである。敬意は低い、相手に対して、親愛感を持っている。

「この「ナイ」は、「ナ」に「イ」がついたのではなくて、「ナイ」のよびかけのさまざまに使い、また、つかいひろげるうちに、その発想なり、強調なりにしたがって、実質「ナイ」という形に、うちだされたと受けとってよい場合が、少なくないようである。」(日本語表現の文末詞―その存在と生成―藤原与一)

「ナイ」が崩れてくると、「ニヤ」となる。崩れるのであるから、そのぶんだけ、「ナイ」よりも、品位はおちる。

○ツメタカッタロ ニヤ。ハヨ テバ アブレ。冷たかったらうね。早く手を暖ためなさい。(老女↓孫)

○エー イットンナッタ キヤ。ソラ ヨカッタ ニヤ。

そう一等になったかい、それはよかったね。(老母↓孫)

例にもあげたように、多くの場合、家族間で、親から子へ、夫から妻へと使われている。年寄になるほどよく使う。隣近所の子どもなど

へも使っている。親愛感をもったものではあるが、敬意は低い。

むすび

以上、山江方言の敬意表現について、みてきたが、ここで述べたものが、敬意表現のすべてとみることはできない。敬意表現は、範囲も広く、複雑であるから、ここへのべたものは、一部にすぎない。

時代とともに変わっていくことを、現時点でとらえることは、興味深いものがある。山江方言は、他の土地よりも、古い形の敬語(鎌倉、室町時代成立のものなど)が、比較的、形をとどめている。

土地人の敬語意識は、昔ほどではないかもしれないが、しかし、まだかなり高い。だが、老人層と、若年層とでは、敬意表現に、大きなへだたりのあることが認められる。共通語「デス」などを使いつつある若年層、古い型のことば(方言)「モス」「グザンス」―ていねい語―などを使っている老年層。このへだたりは、今後、ますます、大きくなるものと思われる。やがては、古い型の敬語は、消えていく連命にあるのかもしれない。

山江方言の敬語は、鹿児島県に近いという地理上の理由などからか、鹿児島的要素(「ヤル」「モス」など)が強い。しかし、現在、熊本方面からの影響は大きく、少しずつ、熊本の敬語(「ーシナッセ」「ーイカシタ」など)が使用されつつあることが、感じられる。

今後のこれらの敬意表現の動きが、注目されるところである。